

海軍整備兵として見つめた太平洋戦争



瀧本 邦慶(たきもとくによし)さん(92) 大正 10(1921)年 香川県三豊市生まれ
海軍整備兵として戦地へ。真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦などを体験し、南方
作戦ではトラック島で終戦を迎え帰還。若者に戦争を語り継ぐため小中学校など
講演活動に活発。東淀川区在住

大正 10 (1921) 年に香川県三豊郡桑山村で生まれました。今は三豊市豊中町というみたいですけどね。観音寺商業高校を卒業した 17 才の時に海軍を志願したんです。僕は陸軍が嫌いでね。この時代には徴兵制があって、20 才になるとほとんどが陸軍に取られることになっていました。中等学校に入ると教練があって、上級生は陸軍と同じような訓練を受けさせられるわけです。そうすると陸軍は歩くでしょ、重い荷物を背たろうて。あれが嫌でね。同じ兵隊に取られるんなら、早くから志願して自分の好きな海軍に入ろうと思って試験を受けました。身体検査と簡単な学力試験があって、昭和 14 (1939) 年 6 月に佐世保海兵団へ入団することになりました。

洗脳されても変わらぬ親子の気持ち

兵隊へ行く時の気持ち？ そりゃ小学校に入った時から軍国主義教育を受けて完全に洗脳されてましたから。学校の教科書は全部国が指定したものだけ、先生は本に書いてあること以下は生徒にしゃべってはいけない。今からは想像もできないくらい軍国主義がピークの時代でした。

親も子も国民全体が洗脳されてたわけですよ。小学校1年に入ったら、男の子は五体満足なら兵隊に行っ、死んだら靖国神社にまつわれるというのが最高の名誉だと教えられたんです。戦争に行くのは嫌やということなんて言えた雰囲気はありません。

父も元海軍の軍人でしたから入隊する日に「今から行って参ります」と挨拶すると「おう、行ってこい」と送り出してくれたのに対して、母は「気をつけて行っておいでや」と言うんです。それが精一杯の心遣いなんですよ。だって兵隊に行ったら死ぬんですよ。その覚悟の僕に「気をつけて」ってね。「死なないで」とは言えない。いくら国中が洗脳されているとはいえ、親の気持ちというのは変わらんもんじゃないですか。

僕自身も心の底では本当は行きたくないですわな。行ったって死ぬことわかってるんやから。私も大勢の人に見送ってもらって汽車に乗って、友達らが見えんようになったところでやっぱり涙が出ましたわ。

生命の危機を感じる“いじめ”

入隊すると陸戦の方法や船の上での生活、ボートやカッターの漕ぎ方など海軍兵としての基礎訓練を半年受けました。その後、自分が乗り込む船が決められました。「八重山」という1200トンの船で、機雷を戦艦に敷設するための敷設艦と呼ばれる船です。自分の乗る船は決まったんですが、当時「八重山」は日中戦争のシナ海での作戦に参加していたので海の上にいました。そこで商船に便乗して台湾のキールで「八重山」に乗り込むことになりました。

ここからが大変でした。海軍には悪い伝統が残っていたんです。いじめですね。「軍人精神注入棒」というので上級兵から思いっきり殴られる。船によって気質は違うと思いますが、うちの船は特にそれが激しくて「この船に乗っていたら殺されるな」と思うくらい厳しいいじめにあったんです。自ら退艦するためには、自殺するか逃走するかしかない。あとは専門技術や知識に関する試験を受けて受かると、違う兵科として転属することができたんです。私は生命の

危険すら感じていたからもう何の試験でもよかった。とにかく一日でも早く受けられる試験というのが「整備」だったんです。興味があったわけでもないけれど、なんとかそれに合格して半年間乗った「八重山」から横須賀にある追浜海軍航空隊に移ることができました。昭和 15（1940）年 5 月のことです。

空母に乗り込み戦地へ

航空隊で半年間整備に関する学校に通い、四等一般水兵から三等整備兵になりました。海軍になると一人一人兵籍番号というのがつけられてね、今でも覚えてますよ。「佐志整 2143」。佐世保の志願兵、整備兵という意味ですね。その後、私はあの航空母艦（空母）「飛龍」に乗り込むことになったのです。昭和 15 年 11 月頃、ここから本当の艦隊生活がはじまったわけです。

空母はなんといっても海軍の花形。太平洋戦争以降は航空戦が主流となり、海上で戦闘機が離発着する空母が一番の戦力になっていたんです。それでも当時国は戦艦大和を作ったわけですが、あんなもん無用の長物ですよ。アホみたいに大きな戦艦作ってね。

長さ 230 メートル、幅 24 メートルの空母「飛龍」に佐世保から乗り込んで、戦闘のない時は、ずっと洋上訓練をしているんです。いくら大きいと言っても海の上に浮かぶと小さなもの。そこをめがけて戦闘機がばんばん発着訓練をするんですが、これが命がけ。僕ら整備兵はこれに爆弾を抱かせたり、整備したりするんです。鹿児島湾で低空飛行の訓練をよくしていたのですが、あとから聞いたらあれが真珠湾攻撃の訓練やったんです。だいたい丸一年くらい洋上訓練を重ねました。

アメリカとの戦争に疑問も

そして、昭和 16（1941）年 11 月 24 日、自分も乗り組んだ空母「飛龍」は千島列島択捉島の単冠湾に集合して、艦隊を組んで真珠湾に向かうことになりました。奇襲攻撃なので隠密行動をとらないといけないでしょ。だから商船にも出会わない時期に最も荒れた北太平洋を回る航路を取ったんです。30 年前までの気象条件を精査して選んだそうですよ。

我々も知らされたのは出航後。よほど大きな演習だなと思っていたら、艦長から真珠湾攻撃について知らされたんです。世紀の作戦を告げられても乗組員は特別湧くこともなく、淡々としていました。なんせ訓練で既に命がけの体験

をしていますしね。12月8日、真珠湾攻撃の結果はご存知の通りです。

でも、私はアメリカと戦争をすると聞かされたその時、心の中では「こんな戦争をおっぱじめて大丈夫かいな」と思っていましたよ。ちょっとは地理を知っていたので、日本みたいな小さな国が原油もないのに、どうやってアメリカと戦うのかと。

ミッドウェー海戦の真実

真珠湾攻撃の後は、ベトナム、ジャワなどの東南アジアの産油地域を押さえにいきました。いわゆる南方作戦です。これが快進撃を続け、国中が浮かれまくっていました。勝ち戦ばかりで敵なしの状況でしたから。こんな状態でミッドウェー海戦へ向かいました。昭和17(1942)年5月27日海軍記念日に出撃したのです。赤城、加賀、蒼竜、飛龍。海軍の虎の子とも言える4つの空母で艦隊を組んで、鼻歌まじりで出動したんです。でもこれがわずか一日で壊滅するんです。敵はこちらの暗号をすべて解読していたようです。

私の乗っていた飛龍には1500名が乗っていたのですが、爆撃を受けて1000人が亡くなりました。私は何とか船の端に逃げて生き延びたんです。爆撃を受けて燃え盛る飛龍は全速で逃げるのですが、私たちは艦長の命令なしに船から逃げる訳にはいきません。海軍は自分の意志で船から離れると逃亡罪になってしまうんです。空を見ると飛龍から飛び立った航空機が着艦しようとしているけれど、燃え盛る「飛龍」には着艦できない。上空を旋回し、燃料がなくなるとともに次々と海に突っ込んでいくんです。私たちはそれをじって見てることしかできない。これが戦争の実情です。

艦長から、生き残っている者は駆逐艦に乗り移るように命令を受け、我々も近くの船に乗り込みました。それでも飛龍はまだ沈まない。いつまでも浮かんでいる空母は、アメリカ軍に戦利品として取られてしまう。そうすると軍事機密が敵に渡る。そういう判断から私たちの乗り移った駆逐艦から2発の魚雷を飛龍に向けて発射させ自らの手で撃沈させたのです。責任を取った艦長と司令官もまた乗り込んだ飛龍ともに海に沈められたのでした。そんなこと信じられますか。

内地へ帰ると、ミッドウェー海戦では4つの空母が壊滅したのもかかわらず、大本営発表は「1隻撃沈1隻大破」というもの。それが戦争の実情です。政府や国が何を言っても、だまされたらあかん。鵜呑みにすることなく自分の頭で

考えないといけない。自分の命は自分で守らないといけない。国はいざとなったら命を守ってくれない。私が若者たちに伝えたいのはそういうことです。

=====

瀧本さんはミッドウェー海戦からの帰還後、海軍での立身を目指して1年間海軍高等科で学び翌昭和18(1943)年6月には下士官に昇進し、海軍二等整備兵曹として任官することとなる。昭和19(1944)年1月に五五一航空隊に入隊。南方作戦の重要な補給地であったトラック島へと上陸すると同時に、1万5千人の戦死者を数える奇襲攻撃を受けた。壊滅状態の島には食料、医薬品がほとんどなく部隊は裸同然。多くが飢餓生活を送る中でも上官だけが銀飯を食べることへの矛盾や、仲間同士が争い合う姿に改めて「一体誰のための戦争なのか」ということについて考え直したという。まさに九死に一生を得た、これら一連の体験は平成18(2006)年12月に自ら筆を取り『それでも君は銃をとるか』としてまとめられている。

参考資料：

2006年若者に告ぐ私の戦争体験と主張『それでも君は銃をとるか』瀧本邦慶
毎日新聞連載『平和をたずねて』広岩近広(2013年5月28日～全20回)